

2-1. 深澤家住宅

1) 史料から見る深澤家住宅

深澤家住宅は、はじめ池上熊太郎氏の所有する住宅であったことが『ブラジルサンパウロ州レジストロ植民地アーカイブ』¹⁾に記されている。入植してから20周年を記念して発行された『イグアッペ写真帖』の地図には彼の氏名が記載されている敷地を確認できる。池上氏の敷地はレジストロ植民地西端の362番と364番に位置し、レジストロの中心部から直線で約12kmの距離にある(図2-1-1)。『イグアッペ写真帖』には、池上氏が所有する建物の写真が掲載されており(図2-1-2)、ここで蒸留酒のピンガと砂糖の製造を行っていたという。



図2-1-1 池上熊太郎氏の敷地(『イグアッペ写真帖』に筆者加筆)



図2-1-2 『イグアッペ写真帖』に掲載されている池上熊太郎家住宅兼工場

写真帳によれば、池上氏は長野県上伊那郡の出身で、1919(大正8)年5月にブラジルへ渡ってきた。250町歩ある敷地を義理の弟と共同で、現地人を雇用しながらコーヒーを3,000株栽培し、米とサトウキビの田畑として、それぞれ10町歩を充てており、8頭の馬を所有する「大農者の一人なり」と紹介されている。

池上氏はのちに、深澤家の長男であった伯一郎氏を養子に迎えており、レジストロ入植50周年を記念して作成された『イグアッペ植民地開拓五拾周年記念』²⁾には、深澤家が所有する2階建て住宅と工場が掲載されている(図2-1-3)。深澤家には、この写真と同じ方向から撮影された古写真が残されており、その裏面には「1936年10月26日」とする撮影日が記されている³⁾ことから、2階建て住宅の竣工は1936(昭和11)年頃であると推察される。

現在は、古写真が撮影されたと思われる北東方向には樹木が生い茂り、同一角度で確認することは難しいが、反対側の南西方向には平坦な土地が広がっており、ここから2階建て住宅と既存の工場の全景が見渡せる(写真2-1-1)。

1) レジストロ郷土史会『ブラジル サンパウロ州レジストロ植民地アーカイブ 建物写真から見る村と町の風景』私家版

2) 松村俊明他編『イグアッペ植民地開拓五拾周年記念』レジストロ連合青年会,1963.12

3) 内田青蔵「戦前期のブラジル移民の建築遺構—レジストロ植民地の事例—」『比較民俗研究 28』pp.203-213, 2013.11



図 2-1-3 『イグアッペ植民地開拓五拾周年記念』に掲載されている深澤家住宅



写真 2-1-1 深澤家住宅（北東面）

2) 深澤家住宅の現状について

深澤家住宅は、長いあいだ空き家となっていることから劣化が急速に進み、部材の腐朽が随所で見られるなか実測調査を行い、現状図面を作成した。

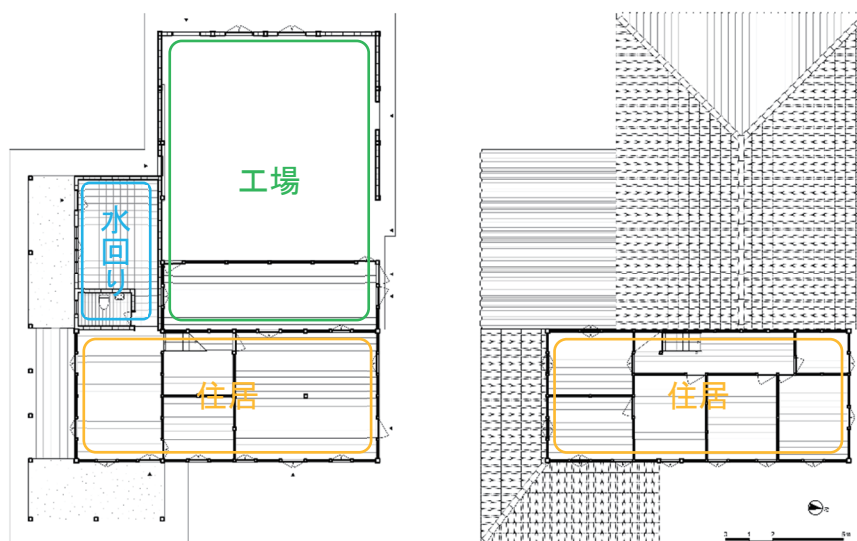


図 2-1-4 深澤家住宅の現状平面と名称区分（左：1階、右：2階）

その結果、建物は工場の一部を取り壊したところへ2階建ての住居を新築し、台所と便所を増築させていったことを現地調査によって確認できた。ここでは、池上氏がピングと砂糖の製造を行っていた「工場」と、新築した2階建ての「住居」、ならびに台所や便所などの現代機能を付加するために増築された「水回り」に分け、順に解説していく(図2-1-4)。

竣工年が一番古い「工場」は、桁行12.6m×梁行9.2mの木造平家建てに寄棟屋根が掛けられ、外部は柱型をあらわし全体を塗籠めている。

壁はレンガ積となっているが、「住居」に接する部分は土壁となっている。これについては「工場」の開口部からレンガで塞がれた箇所を確認できることから、レンガは後補のものであることが分かる(写真2-1-2)。また内部は土壁によって間仕切られており、3.0m×9.2mと9.7m×9.2mの二室からなる。西側の空間には支柱がなく土間である。室内の北面と西面の仕上げは外壁と同じであるが、南面と東面は木製の柱が表れた真壁造りである。「住居」に接する部屋は土間となっているが、根太の痕跡を確認できることから、かつては床板が張られていた空間であったことが分かる。ただ、両室とも天井はなく和小屋組みが露出しており、4本の大梁が架けられている。大梁には3本の中引き梁が直交し、その両端には小屋束が立ち二重梁となっている。二重梁の上には母屋が架けられ、中央の中引き梁には棟木を支える小屋束が立つ。棟木から軒桁へ向かって丸太の垂木が架けられ、屋根勾配は4寸5分である。寄棟屋根にはスパニッシュ瓦が葺かれているが、妻方向の屋根には亜鉛鋼板が葺かれている。なお、野地板は葺かれず小舞に瓦が固定されている。

ちなみに、実測調査を行った前年の目視調査では屋根葺き材は全てスパニッシュ瓦で、4本ある大梁は全て野太い丸太が使用されていた。ところが、実測調査では屋根葺き材の一部は軽量化させるために亜鉛鋼板とし、大梁の一部はユーカリの丸太に置換され、壁面には梁の断面が小さくなったことで生じた隙間は塞がれず放置されたままであった(写真2-1-3)。



写真 2-1-2 「工場」の塞がれた開口部



写真 2-1-3 「工場」の小屋組み

この工事は文化財の修復に携わる技術者が工事を請け負ったものの、不適切な作業が遂行され問題となっていることを、レジストロ日伯文化協会副会長である福澤一興氏からの聞き取り調査で明らかとなっている。

続いて「住居」について説明する。「住居」は桁行 12.8m×梁行 5.5m の木造 2 階建てにフランス瓦葺きの寄棟屋根が掛かる。外部は四隅の柱と「工場」と接する西面に加え、1 階の北面と東面は真壁造りとしている。その一方で、1 階の南面と 2 階の北面、東面、「工場」と接しない西面は大壁造りとなっている。なお、外壁の仕上げは 2 階が土壁となっているが、1 階は土壁に白色の塗り物が施されている。

室内は 1 階に 4 室ある。南側から順に 5.5m×3.7m の居室があり、続いて 3.0m×2.8m の居室が 2 室並び、5.5m×6.1m の居室が設けられている。南側の居室の東面には内開きの玄関扉が設けられ、室内は床板が張られ、根太天井である。並列する 2 室の小部屋のうち西側の居室は床板が外されているが、上階へつながる側桁階段が設けられている。もう一方の小部屋は床板張りで、根太天井となっている。一番北側の居室は土間となっているが、レンガ基礎の上に回されている土台には、根太の痕跡を確認できるために、かつては板張りの空間であったことが分かる。天井はなく上階の床を表した根太天井となっているが、部材の著しい腐朽のため仮設の柱が挿入されている。

階段をのぼり 2 階に上がると、幅 1.8m の廊下があり、突き当りには 1.8m×2.3m の小部屋がある。廊下に沿って東側に 3.7m×3.0m の居室が 3 部屋並び、北側に 2.7m×3.7m の居室が 2 部屋並んでいる。2 階の室内は同一の仕様となっており、柱を見せる真壁造りで、土壁には白色の塗り物が施されている。柱の一部は面皮のある木材（写真 2-1-4）が使われ、天井には廻り縁が設けられ小幅板で段差を付けた大和葺きの天井貼り（写真 2-1-5）とし、数寄屋風の意匠となっている。



写真 2-1-4 「住居」2 階の面皮柱



写真 2-1-5 「住居」2 階の天井仕上げ

なお 2 階は全て天井が貼られているが、腐朽した部分から小屋裏を確認したところ、和小屋組の二重梁であった。ちなみに、梁の側面は手斧で仕上げられた痕跡と陸墨が打たれていたことを確認できたものの、墨書きは見当たらなかった。

「水回り」は 6.4m×3.5m で、片流れの屋根が掛けられ、「工場」と「住宅」に接して南側に増築されている。その時期については判然としないものの、壁はレンガ積で開口部には鋼製サッシが建て込まれていることから、戦後に手が加えられたものであると言える。

なお、「住居」から「水回り」にかけてL字型のベランダが設けられているものの、「住居」の桁や土台には梁や根太の痕跡を確認できる（写真 2-1-6）。従って、この部分は古写真に写っているが、現在のベランダは「水回り」を増築したときに改修されたものと考えられる。



写真 2-1-6 ベランダの桁と土台に見られる痕跡（○印は梁と根太の痕跡）

3) 「住居」の建築的特徴

「住居」の柱間について、2階の東面に着目すると窓と壁が交互に設けられている。窓幅は芯々で平均 930 mmだが、窓間となる壁の寸法にはバラツキが見られる。南側の2スパンは平均 903 mmで、北側の5スパンは平均 1110 mmとなっているが、これは既存の「工場」の梁行寸法に合わせたために窓間の寸法を広く採っていることが現地調査によって明らかとなった。また2階の西面に着目すると柱の位置は、工場の母屋と棟木の位置に合うように柱割がなされていることが確認できた（写真 2-1-7）。



写真 2-1-7 「工場」(左)と「住居」(右)の取り合い部分

続いて窓枠について説明する。2階は欄間付きの両開きガラス窓で、窓枠のコーナー部を45°に納める大留めとなっている。

1階の窓は、玄関のある居室と2室が並んでいる居室には両開きのガラス窓が建て込まれ、その他の開口部には板戸が建て込まれている。南面は大壁であることから2階の窓枠と同じ納まりとなっているが、その他の開口部は真壁造りの柱へ窓台と窓楣が取り付けられている（写真2-1-8）。劣化の著しい「住居」では、木材が腐朽し崩落した仕口の納まりを確認したところ、外部に面する柱の一部を欠き取らずに残していることが分かった（写真2-1-9）。



写真 2-1-8 「住居」の真壁造りの窓 写真 2-1-9 「住居」の窓台が外れた柱の仕口
枠

これは美観的な効果に加え、窓台と窓楣が取り付け部分の柱を完全に欠き取らないことで外部からの雨水の浸入を防いでいたと考えられる。深澤家住宅の建設に従事した大工は判然としてはいないが、同一敷地内にある凝った意匠を持った聖公会教会堂の建設には大工の林今朝士が従事していたことが分かっており⁴⁾、「住居」の柱割りや窓枠の納まりを見ると高い技術を有していた林の関与が推察されよう。

4) “Bens da Imigração Japonesa no Vale do Ribeira”には、聖公会を建設した大工は“WADA”と記されているが、大工棟梁は林今朝士であることから、和田は林の下で働いていた大工であると考えられる。